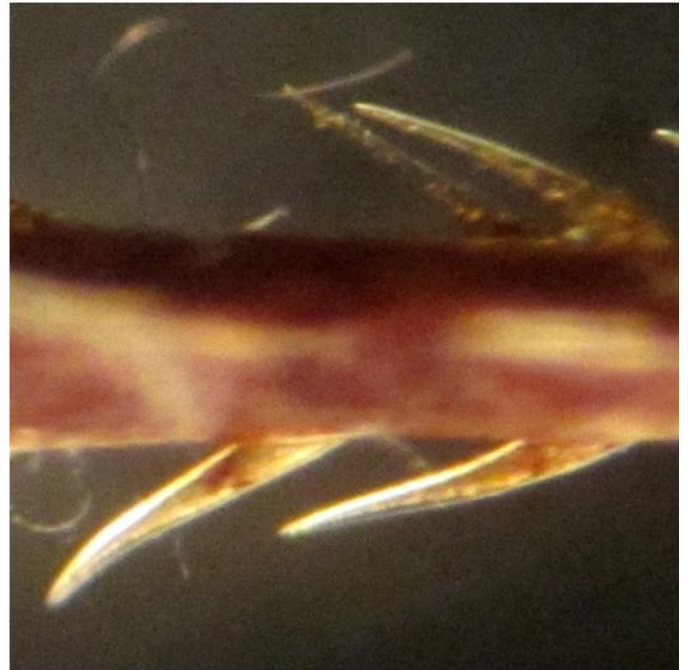


「アメリカセンダングサ (3)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋



アメリカセンダングサの種子には、2本のトゲがついている。このトゲが袖やズボンに刺さる。先端が尖っているなので、刺さりやすいことは確かだ。しかし、普通のまっすぐなトゲだったら、すぐに抜けてしまうはずだ。しかし、顕微鏡で観察すると、その秘密がすぐにわかった。



(×400 反射光)

更に拡大して観察すると、小さなトゲは透明なことがわかる。いかにも硬そうだ。太いトゲの長さは2mm、小さなトゲの長さは0.1~0.2mm程度しかない。これなら、動物の毛にもからみ付きやすいだろう。



「アメリカセンダングサ種子のトゲ拡大」(×100)

太いトゲの表面に、小さなトゲがびっしりと付いている。しかも、その向きが刺さる方向とは逆に付いている。その小さなトゲは、先端ギリギリまであるので、布にちょっと触れただけでも、落ちないのだ。



釣り針の先端にも似ているが、一番仕組みが似ているのが、この特殊な釘だ。ブルーシートや、除草シートを、地面に固定するに時に使う、樹脂製の大きな釘である。打つ時は簡単に入るが、一度打つと容易には抜けない。これは人間の知恵と工夫から生まれたものだ。しかし、植物に知恵はない。気の遠くなるような長期間の進化の結果、子孫を残す為に獲得した、最適の形状なのだ。アメリカセンダングサは北アメリカ原産の野草である。海を渡って、大正時代にはすでに日本で発見されている。渡航した人物の服や荷物に付いて、日本まで来たのだろう。海を渡って島国に帰化してきたのも、この種子の形状のおかげである。(つづく)